

一の宮巡拝

一の宮巡拝会 発行人 関口 行弘

事務局：兵庫県川西市大和東2-13-10 創房関宮(有)内
 電話：072-791-5158 FAX:072-791-5159
 E-mail:junpai@sekinomiya.com

一の宮巡拝と、新しい旅の発見

一の宮巡拝会会員の女流洋画家河村伴世子氏と墨絵画家本多英五郎氏は、巡拝すると同時に参りした一の宮神社の絵を描き展覧会や個展で発表されている。先日河村氏は壱岐・対馬の一の宮にお参りし、天手長男神社の手描きの絵はがきを送っていただいた。階段から見上げた鳥居と御社殿が描かれていて素朴な感じが良く伝わってきた。河村氏の感想は「澄みきった青空のもと荘厳な感じを受けた」であった。思えば平成15年、当巡拝会は第2回全国交流会として、壱岐国一の宮天手長男神社を舞台に元寇の役敵味方鎮魂地球平和祈願祭『壱岐国ルネサンス』を開催した。これは一の宮巡拝会設立者で故入江孝一郎前代表世話人の提案で行われた。一の宮巡拝は「戦後の荒廃した日本を再興するには全国にある一の宮を巡拝すれば、日本の心の原点を取り戻し国民が元気になるだろう」という意図のもと、伊勢国一の宮椿大神社の故山本行隆前宮司らと共に『一の宮巡拝百万人運動』が提唱されたものであった。

壱岐市の原の辻に近い場所に特設ステージを作り、当日は平和を祈念してモンゴル国からチベット仏教のモンゴル国最大の寺院ガンダン寺のハンバラマ猊下ご一行、そして駐日モンゴル国大使や特命全権大使またモンゴル国営テレビのスタッフもお招きした。日本からは高野山蓮花院の東山泰清大僧正ご一行にきていただき両者での鎮魂の法要をつとめていただいた。法要当日も澄みきった青空が壱岐の草原に広がり、読経が天空に吸い込まれるように響きわたった。また、当日は各地の一の宮神社での平和祈願もお願いをし、開催地の天手長男神社では谷口正博宮司の平和祈願祭と国指定重要無形民族文化財の壱岐神楽が奉納



天手長男神社 河村伴世子氏作

され市民も多数参加して神前に時代を超えて敵味方の人達が集い平和を祈念した。

さて、今年はモンゴル日本外交関係樹立40周年に当たる年で、モンゴルではテレビ番組『ドキュメント元寇(蒙古襲来)』を企画している。今年の夏、猛暑の中当時ご出席いただいた駐日モンゴル国特命全権大使ソトプジャムツ・フレルバータル閣下とモンゴル国営テレビのスタッフが日本での取材を再度行った。白川博一壱岐市長は取材の訪問に際し、今後の両国の未来永劫の友好と歓迎の意を表した。

壱岐国ルネサンス当日は全国から巡拝会の会員が多数壱岐に集まった。巡拝の輪が大きく広がっていく第1歩でもあった。

江戸時代壱岐国から全国の一の宮を巡拝した神道家・橋三喜は最近知られるようになった。三喜は今から300年ほど前23年の歳月をかけ一の宮を巡拝して『一宮巡詣記』を著した人物で、当巡拝会では郡順史氏の著作『信念の神道家橋三喜』を発行している。江戸時代のガイドブックともいえる『一宮巡詣記』を元に三喜の人間像を浮き彫りにした冊子である。一方、今年の5月1日、全国一の宮会は公式ガイドブックとして『旅する一の宮』を発行した。

一の宮の歴史や地図がカラー刷りで観光スポットや地方の特産品なども掲載していて一の宮巡拝を楽しくしてくれるアイテムである。

最近はシニア世代に靈場巡りが人気だと言われる。是非一の宮の聖地をこの両書を携え巡拝するという新しい旅に出かけては如何でしょうか。各地の歴史や文化・伝説など各地の特産品やグルメなど新しい発見が期待出来るだろう。

一の宮巡拝会 代表世話人 関口 行弘

入会を希望する方は各事務局へご連絡ください。

一の宮巡拝会本部事務局

〒666-0111兵庫県川西市大和東2-13-10 創房関宮(有)内
 電話：072-791-5158 ファックス：072-791-5159
 E-mail : junpai@sekinomiya.com

一の宮巡拝会東京事務局

〒111-0055 東京都台東区三筋1-12-12(株)アドワーク内
 電話：03-5823-3901 ファックス：03-3865-2135
 E-mail : shio0369@crocus.ocn.ne.jp

一の宮巡拝会関東ブロック第6回交流会 東北地方太平洋沖地震復興祈願と下野国一の宮巡拝

目的地：下野国一の宮・日光二荒山神社～別宮滝尾神社～宇都宮二荒山神社

期 日：平成24年3月17日 日帰り

目的：二荒山神社・両社正式参拝及び滝尾神社にて東日本大震災復興祈願・大祓詞唱和

本年の関東ブロック交流会は、昨年、実施直前に発生した東日本大震災により中止を余儀なくされていた下野国二荒山神社(日光・宇都宮)両社を巡拝する運びとなり準備を進めていたところ、関東ブロック世話人会の意向で東日本大震災復興祈願の祈りと共に参加者全員で大祓詞を唱和したいとの考えから日光二荒山神社別宮滝尾神社に於いて祭式をする事となった。参加者へは事前に大祓詞を配布し各自準備を整えて臨んだ。東日本大震災復興祈願祝詞の作成に当たりましては三田春日神社の総代である岸本氏の協力を得て素晴らしい祝詞文を創る事が出来た。紙面を借りて御礼申上げます。

東京事務局

平成24年春の関東ブロック交流会は、昨年(実施直前に起きた)東日本大震災で中止を余儀なくされた下野国二荒山神社(日光・宇都宮)を巡拝して参りました。

又、先の東日本大震災の鎮魂復興を祈願し、日光二荒山神社別宮・滝尾神社にて参加者による中臣大祓詞を唱和することでした。

当日(3月17日)は小雨にも関わらず遠方からの方を含め28名の参加が御座いました。東京駅を観光バスで出発、代表世話人関口行弘さんより今回の主旨と意味合い、又、副代表塩原輝昭さんより行程の説明等聞きながら一路日光二荒山神社に向かいました。

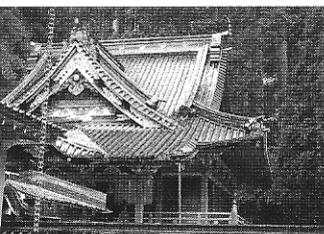
日光は残雪も多くぬかるみの中、足を取られながらも参集殿へ～拝殿に移り正式参拝を致しました。世界遺産

日光だけあり悪天候の中でも参拝者が多く見られました。

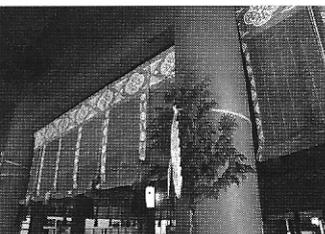
二荒山神社は男体山別名二荒山(ふたらさん)山頂に奥宮、中禅寺湖畔に中宮祠があり、又、毎年男体山登拝大祭



日光・二荒山神社 拝殿



日光・二荒山神社 本殿



日光・二荒山神社 拝殿内



日光・二荒山神社 大黒社



日光・二荒山神社 神門と親子杉

には健足自慢の多くの方が登拝のため全国より集まるとのことでした。

境内各所を参拝後、二荒山神社別宮・滝尾神社にて祈願祭式を行なうため車両を中型バスに乗り換えて、狭い残雪の滝尾道を稻荷川沿いにゆっくりと進み、白糸の滝を望む滝尾高徳水神社脇に駐車。



滝尾神社入口

世話人よりの伝達で、残雪小雨模様のため滝尾神社までの石の階段が非常に滑りやすくなつておらず運試しの鳥居から楼門まで注意して登る様にと指示があった。

お互い足元確認のうえ注意をはらいながら急な石段を助け合ってようやく楼門まで登りました。

さすが東照宮が日光に遷されるまでは、滝尾の周辺が日光参拝の中心といわれるほどの聖地に納得、改めて神氣を感じました。

左手の白糸滝も確認し、今回の参拝の大きな目的である古式中臣大祓と東日本大震災の鎮魂復興の祈願祝詞奏上の支度にかかりました。本殿前は積雪が多く全員立つ事が出来ないため拝殿前で準備完了。世話役3名が水滴にあたりながら先導を務めさせて頂きました。



大祓の祝詞先導役



大祓詞を唱和する参加者

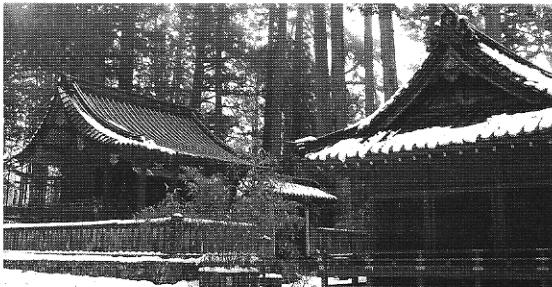
各自、事前に配布された古式中臣大祓詞を持ち、世話役の身滌大祓～修祓を受け、全員にて大祓詞を心一つに唱和致しました。朗々と響く言葉一つ一つが静寂の木立の中に染み渡るようでした。

その後、鎮魂復興祈願祝詞を世話人の塩原輝昭さんが静かに奏上し全員深く頭を垂れ大神に祈願致しました。

大祓詞は通常各神社にて行われておりますが詞の中には多くの言葉（ことのは）が織り込まれ、古事記の記述の部分が重なりより一層祓えの意味の大きさと重要性を示唆しております。

鎮魂復興祝詞は神社本庁制定文とは別に私の地元三田春日神社にて震災直後作られた祝詞で、千年に一度の大震災は言葉（ことのは）に現せぬ有様と素直に述べ、大神の高き尊き大神徳に余震津波を鎮め、悪しき事故をも祓遣りを願い、国を挙げて心一つに復興に勤める国民に神靈幸を給わり、清き美しき大和島根を本来の皇国姿（みくにぶり）に立返らし、平穏しき豊かな町村にと願う素直な祝詞です。

今回は世話人の塩原さんが加筆され一層鎮魂の言葉が心をうち、未だに、復興、事故終結が見えない被災の方々の想いが募り、大神の神靈幸を祈らずにおられませんでした。



滝尾神社本殿と拝殿

順次拝礼を行い、雪上を足元に注意しながら滝尾稻荷神社と滝尾三本杉を拝し、下り石段を滑りころびつ、再び駐車場に向かい待機中の大型バスに乗り換え宇都宮へと車を走らせました。

車中にて関東ブロック定番のシュウマイ弁当をいただき、時間短縮を図り、宇都宮二荒山神社の駐車場に到着。二荒山会館にて暫し休息し、拝殿に移り正式参拝を行いました。

その後、会館に戻り助川通泰宮司様より、詳細なる神社由来、御神徳、又宇都宮市街地の様子などをお聞きし、下野の国作りの中心としての二荒山神社の重要性も現在も受け継がれているとの事でした。併せ、丁重なるご接待

に感謝しつつ宮司様を囲んで記念写真を撮りました。



宇都宮・二荒山神社 助川通泰宮司様と共に

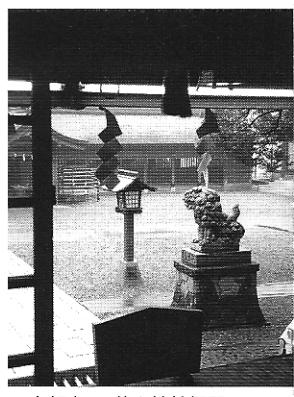
宇都宮二荒山神社(うつのみやふたあらやまじんじや)は、日光二荒山神社(にっこうふたらさんじんじや)と共に下野国一の宮ですが御祭神も別で鎮座地名を区別しております。

宇都宮二荒山神社の御祭神は豊城入彦命で其の4世孫奈良別王(ならわけのきみ)が毛野国の国作りを行ったといわれております。

2008年建て替えられた大鳥居は、目を奪うばかりの大きさで樹齢400年の栃木県産のケヤキで、流石関東有数の鳥居に惚れ惚れ致しました。又、宇都宮市街地の中心地ながら、背後の鎮守の森に守られ静寂と趣もあり、郷土の祖神、総氏神としての重い信仰を受け下野国一の宮に相応しい名神大社に感銘を受けました。宮司様はじめ職員のお見送りまで頂き歸路につきました。



助川宮司様と懇談する関口代表



宇都宮・二荒山神社拝殿からの境内

←宇都宮・二荒山神社拝殿

今回の交流会は初めての行事が多く会員の中には戸惑う場面があったと思われましたが、大祓の祝詞を全員で唱和し日本語の持つ言葉（ことのは）の意味合いを考え、巡拝の一層の意味づけが出来たのではないでしょうか。皆様のご意見等も機会があればお聞きし交流会の充実になればと願う次第です。

東京地区世話人 岸本 鐵夫

一の宮巡拝会24年度全国交流会

甲斐国一の宮・浅間神社と武田神社及び信濃国一の宮・諏訪大社

目的地:第一日目 甲斐国一の宮・浅間神社(正式参拝)～武田神社(正式参拝)～上諏訪・諏訪湖ホテル
全国交流会及び懇親会～宿泊

第二日目 信濃国一の宮・諏訪大社本宮(正式参拝)～諏訪大社前宮～神長官守矢資料館～
諏訪大社秋宮～春宮～万治の石仏～中央本線塩尻駅午後3時解散～東京駅本解散

期 日:平成24年6月16日(土)～17日(日) 2日間

宿泊地:上諏訪・諏訪湖ホテル



諏訪大社 上社本宮御垣内拝殿前にて

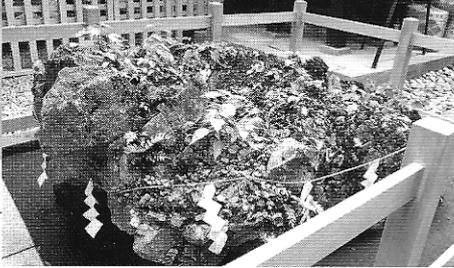
お見送りをいただき次の武田神社へと向かう、途中信玄餅で有名な桔梗家のアウトレットに寄る。武田神社では職員のお出迎えを受け参集殿へ向かい暫しの休憩から手水を済ませて拝殿へ参入し正式参拝をさせて頂く、土橋勝夫宮司様から神社のご由緒を直々に説明して頂き会員一同感謝でした。立派な“さざれ石”を押し次に宝物殿を拝観して職員のお見送りを頂き神社を後にする。中央道を経由して本日の宿泊地、上諏訪の諏訪湖ホテルへ向かう。夕宴前の全国交流会では関口代表世話人から大震災後、会の活動が停滞してしまった事を強く反省していると報告された。今回の全国交流会を契機に活動を再活性化させる事が大事である事を再認識致しました。懇親会では一人ひとり自己紹介から会員の声を聞く事が出来た。活発な話題が出され宴も盛り上がりました。締めは何時も通り木曾の池田聰寿社長の木遣りと「よいしょ・よいしょ」の掛け声高らかに終宴致しました。

第二日目は、朝食後、先ず諏訪大社上社本宮へ訪れ早朝の清々しい大気の中で正式参拝をさせて頂きました。御垣内で記念の集合写真を撮影後、宝物殿を拝観し更に御柱祭の最新DVDを観賞させて頂き祭りの莊厳を感じました。北島和孝権宮司様からご挨拶とお見送りを頂き本宮を後にする。上社前宮を全員揃って社頭参拝し社を一周し御柱を押し炎天下バスまで戻る。次に神長官守矢資料館へ寄る。かって御柱祭に次ぐ重要な祭りとされていた御頭祭で神様へのお供え物で有った鹿や猪等の頭をはじめ、兎の串刺し、等などが展示されていた。館長さんから説明を頂き古祭の一旦を知る事が出来た。昼食はそばの有名処、田毎庵でそば懐石を食し、下社秋宮へと向かう。気温は高く暑い一日となつたが順調に秋宮から春宮を参拝し最後に万治の石仏を拝観して今回の巡拝会は終了した。バスは一旦中央本線の塩尻駅へ向かい、関西方面に帰る会員達と別れてから東京へと戻り恙なく全国交流会を終了いたしました。

東京事務局 塩原 輝昭



神話と歴史の旅



一の宮巡拝会に参加して

野島さんの誘いで一の宮巡拝会に参加した。団体での神社参拝は、小学校(当時国民学校)1年生の正月、先生に引率されて近くの神社をお参りして以来である。当時の記憶を思い出しながら、参拝させて頂いたが、意外だったのは、普通の日なのに、各神社ともお宮に来ている人がかなり居たことである。今はどこも観光地化しているので、人が多くても不思議はない。

最初にお参りした山梨の甲斐国一の宮・浅間神社では、お神酒が葡萄酒だったのは面白かった。地元の産物

を選んでいるのは賢い方法である。いつごろからこうなったのか、知りたいと思う。創建時からなのだろうか。また、次に訪れた武田神社では国歌に歌われている“さざれ石がいわおとなりて”の“いわお”を見た。確かに“いわお”となっている。中学生の頃から小石が大きくなる訳がない。国歌は科学的ではないと思っていた。けれども武田神社の“さざれ石”は確かに“いわお”となっていたので自分の中では一応の解決は着いた。この“いわお”を見ただけで今回の旅の意味があった。

荒木 幸

一の宮巡拝会を通して、日本の神話を学ぶ!!

地上に降り立った邇邇芸命が美しい乙女(木花之佐久夜毘賣命)に出会った。場所は鹿児島県(野間半島・野間岬、笠沙に日本最初の宮跡地が現存している)である。

そこから大和の国方面に移動した。日本一美しい富士山の近くには木花之佐久夜毘賣命を御祭神とした神社が多い。今回の甲斐国一の宮・浅間神社(木花開耶姫命)もそうだ。みめ麗しく生まれるといつの世もそれだけで徳

が多い。歴史を変える事すらある。

クレオバトラのように…。私も少しあやかりたかった。

大国主の御子である建御名方神は“國譲り”的場面で負けた。敗者となり追い詰められて諏訪の国まで逃れてきた。建御名方神の偉い処は“負けを認めた”ことにより、今でも諏訪大社で祭られている。負けるが勝ちの教訓を得た。

野島 洋子



古代の息吹きを体と魂が会得する

諸国 の宮巡拝のすすめ

初代 一の宮巡拝会代表世話人 故入江孝一郎

日本は、こんなことをしているとダメになる

日々起きる事件をみると、誰しもが日本はダメになることを感じる。古い話であるが、昭和十八年（1943）の秋、当時戦局の不利を誰しもが口には出さないが、肌で感じていた。

「日本は、こんなことをしているとダメになります。」と仲小路彰先生が強い言葉で批判されたことを今も強く印象に残っている。それから長年の歳月が過ぎたが、その言葉の内容は今も変わっていない。そればかりか日々起きる現象はダメどころか、日本人の姿をしているが、かつての日本人が消えてしまったもどかしさを感じている。これは若者だけではない、われわれ老人にも言えることで、自らを戒めねばならない。

諸国一の宮巡拝者の数は年々増えている

諸国一の宮を巡拝する人の数が、自然発生的に増えている。平成十年（1998）十月二十二日、完成したばかりの『全国一の宮御朱印帳』を伊勢国一の宮椿大神社故山本行隆宮司に揮毫してもらい「隗より始めよ」というので、諸国一の宮御朱印の巡拝をはじめた。そのとき感じたことは、参拝する神社はその国の一つの宮であることを知っているが、全国のどこに一つの宮があるのか、案内されぬばかりか神職も知らない状態である。そこで近畿地区の巡拝者から希望があったことから、一の宮巡拝会をつくり会報で啓蒙と、翌年七月一日『一の宮巡拝』第一号を作成し諸国一の宮の社務所から配布して貰うようにした。

自然に神恩感謝の気持が

諸国一の宮巡拝で感じられるのは、最初は家内安全・身体健康、商売繁昌を神様にお願いしていたが、巡拝を重ねるうち、無事に御朱印をいただけたとか、神社の開門時間に間に合ったとか、ささやかな喜びで最高に満足し、神様に感謝の気持が湧いてくる。これは巡拝した人でないと解らない。『全国一の宮御朱印帳』に御朱印の数が増えるにしたがって神様の「気」が満たされ、自然と元気になり、御朱印帳が宝物に思える。それは神様におねだりするのではなく、神様に感謝の気持が自然と湧くからである。神域に身を置くことによって古代創建以来の空氣と水、樹木の風が、直接神様の「意」となって伝わり、その感動が自ずから感謝の意となる。

自分をなくすこと、自我を没却することが、神様に理屈なく感謝する気持になり、神様の「意」を受けることができる。仏教も無我の境地を得ようと修行しているが、何も難しいことなく、諸国一の宮巡拝の巡行を重ねている

うちに、この境地に自然になれ、知らずのうちに立派になれる。こんな素晴らしいことはないと気づいた。

一の宮巡拝者が集まると、はじめてお会いした人でも、心がうち溶けて気持よくお話しすることができるの、このことに由来するのではなかろうか。

『日本はこんなことをしているとダメになる』と、最初に訴えたが、これから脱するには、一人一人の日本人が立派になることで、やがて日本は立派な国になる。国が立派になることは、そこに住む人が立派になることに連なる。迂遠のようであるが、これが最も早い近道であろう。

具体的には、自分自身の『諸国一の宮御朱印帳』を持って、一の宮巡拝をすることを、自分自身に誓い、自分が実行するだけである。あとは諸国一の宮のあるところへ機会をつくり参拝すればいい。そして生涯のうちに諸国一の宮巡拝を完拝すればいい。暇がないとか、お金がないとか、出来ない理由をあげれば数々あるが、そう思えば、その機会はいくらでもできる。お金も不思議とできる。最初は人にすすめられて巡拝するが、実行は自分自身が決めることがある。御朱印の数が増えると『諸国一の宮御朱印帳』は、その人にとって宝物であり、お守になる。自ずと神棚も欲しくなって、神棚に祀る気持になってくる。そのようになったとき、自分で気が付かないが立派になっている。四国八十八ヶ所遍路の最後の高野山奥の院に参っていると、お遍路さんに「ご苦労さまでした」と手を合わせている光景に共通するものがある。

* 時がたつのは早い。七回忌が過ぎたいま、入江先生の言葉を改めて再読していただきたい。

一の宮巡拝・偉大な先駆者

信念の神道家『橘 三喜』を再認識しましょう!!



郡順史著『橘三喜』を推薦する。

皇學館大學教授 井後政晏

寄稿 橘三喜を読んで 杉田 賢一

郡 順史先生は尊王恋闘の作家である。最新作は信念の神道家『橘三喜』を贈呈いただき読み終えた。

橋三喜は寛永十二年(1635年)～元禄十六年(1703年)の人で江戸時代前期の神道家である。故郷、平戸藩の壱岐島天手長男神社が元寇以来、所在地すら分らなくなっていたのを克明に探索、発掘調査し場所定めを行い神社建立までこぎつけられた。以後、諸国の一の宮を巡って神社の由来や最新決定などに大いに活躍された。三喜の研究成果や教えは橋神道として世に広まったという。書の前半は幼くして学問の姿勢定まり、神道の神體を身につけるまでの様子や師弟教育、衆人への神道宣布の様子、舞の確立などの業績が物語風に記載され実に読み易くなっている。壱岐での天手長男神社建立までの苦難と御宝鏡発見の感動、伝説の誤りを正す凜とした学者魂など面白く読ませて戴いた。神社造営に反対し刺客として対峙する青年に理を持ってこれを糾し、毅然たる態度をもって納得させる場面など、橋の学問に対する「信」の強さを余りなく表現されており躍々として胸に迫るものがあります。書の後半は芭蕉に先立ち全国行脚。神道による国の堅めに全力を尽くした人生を旅日記風に表現。芭蕉に付き従った曾良が橋の弟子であったとは驚きでした。諸国一の宮の踏破と縁起、祭神、造りの記載。江戸時代仏教に染まる以前、日本の神々の定立を目指した方がいたことは実にありがたきことあります。郡先生の武士道作品はわたしも大ファンですが久しぶりに新作を読ませていただき大いに堪能できました。

(草莽通信 第38号拔粹)

ご購入希望者は東京事務局まで

定価 2,500円(税込) 上製本B5版288頁(送料別) <神社様・会員は特別価格あり>

◎送料 1冊…500円 2冊…800円 3冊以上…1,000円 ※離島・一部地域は追加送料がかかります。

告知

第七回交流会ご案内

「全国」の宮会編 公式ガイドブック

◆全国」の宮めぐり

皆様方にはますます御健勝のこととお慶び申上げます。平素は一の宮巡拝会の各行事にご参加並びにご協力を賜り、ありがとうございます。さて、今年も来る十月二十一日(日)に一の宮巡拝会近畿ブロック交流会を開催する運びとなりましたので、ご案内申上げます。

今回は左記の通り、湖国に鎮座する近江國一の宮「建部大社」と冶金の神様として金山彦命を祀る總本宮・美濃國一の宮「南宮大社」を巡拝するコースです。

諸国一の宮と神社の歴史など関心のある方・会員の皆様の情報交換や親睦を深め合う場となれば幸甚です。皆様お誘いあわせの上ご参加賜りますようお願い申上げます。

近畿ブロック会話人 高寺壽

●目的地 近江國一の宮(建部大社)・美濃國一の宮(南宮大社)

●日 程 平成二十四年十月二十一日(日)帰りバス巡拝

●参加費 一万二千五百円(玉串料・交通費・昼食・飲み物含む)

●集合場所 JR京都駅新幹線八条バスターミナル

●集合時間 午前九時十五分(時間厳守)

●服装 正式参拝をしますので、相応しい服装をお願いします。

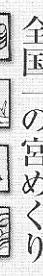
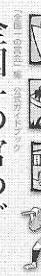
スケジュール
京都駅→建部大社(正式参拝)→名神HW→彦根城→
昼食(彦根キャッスルホテル)→名神HW→南宮大社
(正式参拝)→岐阜羽島駅→京都駅(解散)

参加申込は九月二十五日までにFAXまたは電話にてお願いいたします。

FAX ○七二五ー三一四〇四〇
電話 ○八〇一三一〇八一四八八一(高寺)

「全国」の宮会編 公式ガイドブック

「全国」の宮会編 公式ガイドブック



◆旅する一の宮

「一の宮めぐりをもっと気軽に旅するガイドブックとして新たに平成二十四年五月一日に発行されました。」

一の宮めぐり

新刊

新刊